

日本精神神経学会と「共働（協働）」

渡辺 雅子 Masako Watanabe
日本精神神経学会理事

本学会の定款3条に則り、私自身が理事の一人として、今後の学会活動に特に重要であると考えている点を3点挙げたいと思います。

第1は、男女共同参画です。2021年2月に49名（全体の26%）の女性代議員が選出され、6月には4名の女性理事（全体の17%）が選出されました。神庭重信前理事長の活動報告および久住一郎理事長の本年年頭のご挨拶でも言及されており、約120年の本学会活動のなかでも大きな変革です。石井知行初代男女共同参画委員会委員長の先見のおかげでもあります。今後は、Science誌の、女性割合の高い集団がcollective intelligenceが高いという論文¹⁾を証明していく段階です。精神疾患患者の半分は女性であり、治療においても男女の共同参画が必要であることは言うまでもありません。折よく、『精神科治療学』誌第37巻5号（2022）において、「精神科医療における女性医師の役割と期待」という特集が組まれましたので、ぜひ会員の先生方はお読みいただきたいと思います。

第2は、アンチスティグマ活動とパラダイムシフトです。私は1977年、大学病院で他科病棟に診察に行くときに、その科の看護師から精神科の名札をはずしてきてほしいと言われたことがあります。現在でも、実はまだ施設やタイミングによっては、そのようなことがあると聞きました。これは、患者と家族のもつ精神疾患に対する偏見だけでなく、医療者自身のもつ偏見を表しています。精神科は内科や外科と同じように医療における必須の分野であり、その診察・治療を受けることは、大きなメリットがあることをもっと一般にも医療者にも知っていただく必要があります。

このたび、水野雅文副理事長たちの長年の活動によって、高校保健の教科書に精神疾患が取り上げられることとなりました。この視聴覚教材として、依存、統合失調症、うつ病、不安症、摂食障害を対象に、学会が、患者インタビュービデオを作ることが計画されています。私自身はてんかんを専門としていますが、若いてんかん患者は、てんかんに対する偏見はもっておらず、むしろ無知であること

が多く、若い時に正しい知識をもつことが重要です。そうすれば、親世代や周辺が古い知識や偏見をもっているにもかかわらず、むしろ若年者から啓蒙し社会を変えていくことができます。それは、すべての精神疾患においても同様であり、上記活動は、偏見解消と早期治療にむけて、今後成果を出していくものと期待しています。

長年、医療はその専門性からパターン的な側面が強かったのですが、患者は医療の利用者・受益者であり、その体験に基づく意見を聞くことは、よりよい医療につながります。精神医学・精神医療に関するパラダイムシフト調査班では、患者本人から体験を聞く講演を企画し、関連委員会委員にも聴講を勧めています。いずれは、年次学術総会においても、患者の企画したシンポジウムが開催されていくかもしれません。

第3は、他学会との共働（協働）です。2022年の1月に、本学会と日本産科婦人科学会の両学会共働によって、「精神疾患を合併した、或いは合併の可能性のある妊産婦の診療ガイド」が作成されました。これは、実に大きな仕事であり、かかわられた両学会の方々に感謝申し上げます。1970年代には、てんかんの母親からは奇形のある出産が多く、挙子希望の患者が産科から反対されることがありましたが、現在は奇形も反対も激減しています。このガイドラインが、すべての精神疾患患者の安全な出産の推進力となることは間違いありません。

このようにみえますと、今後の学会の進むべき道は、「共働」にあるといえます。学会内では男女共働と世代間共働、学会外では国内外他学会との共働および社会との共働です。今後世界は、流動化していく可能性が高く、日本もそれに対応していく必要があります。最も効果的な方策はやはり「共働」であり、世界を見据えて今後も会員の先生方の積極的な参加と共働を期待したいと思います。

1) Woolley, A. W., Chabris, C. F., Pentland, A., et al. : Evidence for a collective intelligence factor in the performance of human groups. Science, 330 (6004) ; 686-688, 2010